医療現場におけるスピリチュアル・ケア

── たましいの叫びを前にして ──

藤　井　理　恵

1. はじめに

私は病院の牧師として、一般病棟、ホスピス病棟の患者さんを訪問しながら毎日を過ごしつつ、患者さんと様々な関わりを持たせていただいています。中でもホスピス病棟におられる患者さんは、残された時間が少ない方が多いので、一般病棟の方よりも訪問の密度は濃くなりますので、今回の話はホスピス病棟での話が中心になります。病院の現場で患者さんをから教えられたことを通してスピリチュアル・ケアについてお話しさせていただきたいと思います。

2. ホスピスケア

現在はホスピスに関して関心が高まっているため、大きな誤解はあまりありませんが、私が病院牧師となった約１０年ほど前は、ホスピスに対して「暗い」、「死に場所（二度と帰れない）」というイメージを持つ方がまだまだ多くありました。しかし実際にホスピス病棟で過ごしているとホスピス病棟は、死に場所でなくむしろ生きる場所―残された生命をいかにその人らしく生きていくかを考え、チームで支えていくものであることを強く感じさせられます。いわば一人の人間の人生が完成されるところだといっても良いでしょう。

ホスピス病棟ではその人「らしさ」がもてるように、まず痛みのコントロー

ルをいたします。ガン末期の痛み（激痛）は人格を変える程の痛みですから、もしその方が激痛を抱えたまま苦しんで亡くなっていった場合、本人も辛いですが、家族にとっても大変辛いものとなります。患者さんの苦しむ最後の姿が焼き付いて離れず、強い後悔の念に駆られ、自分たちの選んだケアや病院が良かったのだろうかと苦しむことになります。

ですからまず痛みや症状のコントロールをすることによって、その人「らしく」過ごせるようにし、その方を チームで支えていく—これがホスピスケアと言えるでしょう。

ドクター、ナース、ＭＳＷ、私のような宗教家（牧師）その他に理学療法士や作業療法士、ボランティアの方々等が必要に応じてチームを組んで、１人の患者さんをケアしていきます。

なぜチームでかかわるかというと、私たちは人間を４つの存在 （身体的、社会的、精神的、霊的（スピリチュアル））としてとらえるからであり、これらが統合されて全人（whole person）となると考えています。ですから一人の人間が病み、痛むとき、それは決して肉体的にのみ痛むのではなく、社会的にも、精神的にも、スピリチュアルな面でも痛むと考えられます。

このことについてＷＨＯは次のようにとらえています。

「パリアティブケアとは、治癒を目的とした治療に反応しなくなった疾患を持つ患者に対して行われる、積極的で全体的な医療ケアであり、痛みのコントロール、心理的な苦痛、社会面の問題、霊的な問題（spiritual problems）の解決がもっとも重要な課題となる。

そしてパリアティブケアの実施に当たっては、人間として生きることが持つ霊的な側面を認識し、重視すべきである。(WHO 1990)」とspiritualな側面を重視する必要性を 語っています。

3. スピリチュアルニード

私の属する伝道部は、この人間のスピリチュアルな痛み、ニードに関わって

いきます。

ところでこの４つのニードのうち他の３つのニードは、何とか把握することができます。

①身体的ニード（痛み）…身体の痛み、呼吸困難、吐き気、全身倦怠感等

②社会的ニード…家族の問題、経済的問題、仕事の問題、人間関係、遺産等

③精神的　〃　…不安、鬱状態等

これに対してスピリチュアルニードは“この部分”であると表すことが難しいため、把握するのも難しければケアするのも難しい部分と言えます。

しかし、このニードは全ての患者さんが持っているものであり、患者さんばかりでなく健康な者も全ての人間が持っているものです。

例えばある程度の生活ができ、人間関係に恵まれていても、私たちは心の中に何によっても埋められない部分があるのを感じることはないでしょうか。

それは自分の生きている意味や目的を問うものであったりするでしょう。このような類の問いは、心理学や精神医学の面から分析することができるでしょう。しかし学問的分析からは、この問いを発することの原因は追究できても答えは与えられません。このような問いは学問的な分析によってではなく、様々な関係性（究極的には神との関係によって解決されていくと私は考えていますが)、の中から答えが見出されるような問いであり、スピリチュアルニードとはこのような部分であると私は理解しています。

河合隼雄氏は対談の中で次のように語っています。

「ターミナルケアはだんだん魂のケアになり…魂とは心の深層を越えているような気がします…心を追求していっても到達し得ない領域、身体のことをいくら言っても到達し得ない領域、…生命を生命たらしめているもの、と言うものでしょうか。」

患者さんのスピリチュアルニード

以前病院で患者さんを対象にアンケート調査を行ったところ、４つのニード

のうち、スピリチュアルニードが最も高いことがわかりました。

しかし、殆どの患者さんは直接このニードを医療スタッフに訴えることはなく、逆に言えば間接的にこのニードを訴えていることが考えられます。

スピリチュアルニードはその殆どが意味を求める“問い”の形、自分の存在に関わる“問い”の形で現れされているように思われます。いくつかの例を次に挙げてみます。

1.命の意味（生きている意味）

病気になると、これまで自分でできていたことが、人にしてもらわなければならなくなる。他人のお世話になってしか生きることのできない自分に生きている意味があるのか。

2.人生の価値

今まで価値あるものだと思っていたもの（健康や仕事など）が、病気になることで全く価値を失ってしまった。人生に本当に価値のあるものがあるのか。

3.苦悩の意味への問い

どうして自分がこんな苦しい目に会わねばならないのか。この苦しみに何の意味があるのか。

4.罪責感

こんな病気になったのは今まで悪いことをしてきたからだ。これまで自分がしてきたことが赦されるのだろうか、もし赦されるなら、誰が“赦す”と宣言してくれるのか。

5.死後の世界

自分はもうすぐ死ぬのだろうか。死んだらどうなるのか？

4. スピリチュアケア

(1) スピリチュアルケアとは

このように命の意味や、苦しみの意味への問いかけを持つ患者さんの気持ち

を、人はある程度まで共感することはできるでしょう。しかし、その人の苦しみを分かりきることはできません。苦しみを分かりきることのできない者がその問いを持つ方に軽々しく答えを与えることは不可能です。その答えはその人自身がつかんでこそ真実なものとなるのです。ですからその人自身が答えを見い出せるようにお手伝いをしていくことが私の働きだと理解しています。

スピリチュアルケアのスタートはこれらの問いを発することのできる関係を築くことだとも言えるでしょう。なぜなら誰もが自分の内面に関わる問いに関しては信頼できる人にしか話さないものです。ですから関係が大変重要な要素となります。関係を築くことが、ケアのスタートであり、またケアの大きな部分だと言えるでしょう。

次のようなことが言われています。

「スピリチュアルな側面からの患者の人生についての問いかけは、暖かく優しく、患者自身が持つ価値観や信条を十分に尊重しながら行い、同時に患者がこの問題について黙っていたい権利を持つことも尊重しなければならない。患者はスピリチュアルな面での体験が尊重され、それについての話に耳を傾けて聞いてもらえると期待する権利を持っている。このような体験について話したり、話の意味が理解され、その感想を聞けたりすることが多くの場合、心の癒しにつながる（WHO)」

田畑（1994）“裸の実存になることの重要性”

「霊的ケアとは（ただ心理的な援助というだけではなしに）人間の根元的な次元にまで踏み込んでの理解が必要である。

とりわけ生と死のぎりぎりの状況に置かれる人間にとって、それまでの表面的な関わりや地上的な価値観は相対化、あるいは無化され、いわば“裸の実存”となるから、ケアの場面においては経験的でありきたりな学問や方法では間に合わない。

１回限りの生命の叫びにふさわしく対応するには、こちらの側もまた“裸の実存”として向かい合わなければならない。

そういう場面をスピリチュアル・ケアの次元といえば言えるのではないだろうか。」

(2) 伝道師のはたらき

伝道部に属する筆者は、患者さんのスピリチュアルケアに携わるため、最も多くの時間を病床訪問に費やしています。

ここでは病床訪問以外の伝道部の働きについて簡単に紹介いたします。

メンバー：牧師２名、スタッフ２名、病院宣教師１名

朝礼（礼拝）：毎朝８：30～８：45

　　聖書、讃美歌、聖書のメッセージ

昼の放送：午後１：00～１：30

　　讃美歌、聖歌、聖書の話

＊礼拝、放送は全病室に放送、放映されている

○ホスピスにおける特別なプログラム

お茶会：毎週火曜日２：30～（約30分）　ロビーにて

　歌のボランティアによる讃美歌、聖歌、小学唱歌など懐かしい歌

　　聖書の短いメッセージ

　語らいの時・ボランティアさんによるお茶とお菓子のサービス

＊患者さん同志、家族同士が親しくなり、お互いが支え合う機会ともなる

お別れ会：原則としてクリスチャンの患者さんが亡くなった時、遺族の希望がある場合に行うキリスト教式の小葬儀（病室にて行う）

洗礼式：洗礼の願いを持つ患者さんがある時行う

いくつかの事例を通して、スピリチュアルニード（様々な問い）に対して答

えを見出して行かれた方々を紹介いたします。

(3) スピリチュアルケアーいくつの事例から－

■苦悩の意味 …なぜこんな苦しみを？　ある患者さんの母親の出した答え

患者さんは17才の女子高校生（Nちゃん)。横紋筋肉腫でホスピス入院時には顔面に１キロほどの腫瘍がありました。しかしNちゃんは大変明るく、最後まで病気には負けない！とがんばりました。

Nちゃんのお母さんは、Nちゃんの上の男の子も既に亡くしており、今次の子もなくそうとしておられたのです。私はNちゃんやお母さんと一緒に話をしたり、聴いたり、聖書を読んだりして毎日を過ごしました。

Nちゃんはホスピスにきて約２週間で亡くなりました。亡くなった時、病室でお別れ会を行った時、お母さんが「一言挨拶をさせて下さい」と言われ次のような挨拶をなさいました。

「神さま、神さまはどうして私にこんな重荷を負わせられるのでしょう。

私にその重荷を負っても十分それを背負えるだけの力があるとみなして

私にこの重荷を背負わされたんですね。

私がその重荷を背負っても、十分その明るさを出し、

またそれを感じさせるだけのものを私が持っているから、神さまは私にその重荷を背負わせて下さったのでしょう。

そして神さまは私を選んで、その重荷を背負って歩く私を見るためにつかわされたんでしょうね。

重荷を背負いながらも一生懸命生きる明るいその姿をこれから皆様が見られるのですから神さま、がんばります。

神さまに選ばれ、神さまと共に歩み、神に守られて生きる私になります。」

これはNちゃんのお母さんが彼女なりに見出した苦しみの意味に対する答えであったと思います。

半年後にお便りを頂きました。

「…キリスト教病院での優しかった皆様の顔が思い浮かび、Ｎちゃんがもっと長くそこにおれたらと思い、本当に短かった病院生活のことを思いました。

私たち夫婦も何とか立ち直ろうと、日々努力しております。

神さまの計画の中にこのようなことがあったと考え、誰を恨むことなくＮちゃんは神のもとに帰ったのだと思えば、育てさせていただいたことに感謝しています」。

このお母さんはクリスチャンではありませんでしたが、神さまとの関係の中で答えを出していかれました。

■死後の世界について

Ｎさん、58才、女性、直腸ガン

入院中は“いつ死がやってくるのか”“死んだらどうなるのか”という思いから鬱になっている方でした。一日中ベッドに片手をついて腰をかけてじっと下を向き、誰とも話をしませんでした。そして向かいのベッドの方の病状が悪化したとき、見ていられないとむりやり退院していきました。しかし２週間ほどで自宅で過ごすことが困難になり、再び入院をなさいました。この時入ったのは個室でした。

入院してすぐに、Ｎさんが私に会いたいと願っているという連絡を受け、急いで病室を訪問しました。驚いたことにＮさんは以前とは別人のようにニコニコしながら、まるで昔からの友人であるかのように私に話し始められました。私はその理由を尋ねてみました。

今回入院し、お昼に病室に放送されている聖書のメッセージを聞いた時のこと、その日の放送では「神さまに対して、心を開きましょう」というような内容が語られていました。これを聴き、突然神さまに対して心が開かれるような体験をなさったというのです。

Ｎさんは子どもさんがミッションスクールに通っていたこともあり、父母の会で聖書の話を聞いたり、キリスト教作家といわれる方たちの小説も何冊か読

んでおられました。しかしその時ではなく、なぜ今この時にこのような体験をしたのか大変不思議に思っておられました。

「それは神さまが決めて下さった“時”なのでしょうね」と私は伝道の書にある『すべてのわざには時がある。神のなされることは皆、その時にかなって美しい』という一節を読みました。

またNさんは“死んだらどうなるのか”ということが怖くて苦しんでおられたことを知っていましたので、ヨハネによる福音書から「イエス・キリストが私たちより先に行って場所を用意して下さる、場所の用意ができたなら迎えに来て下さる」ことを共に読みました。すると次のように言われました。「不安が一つ減りました。死ぬ時も神さまが決めて下さるし、行くところが必ずあると思えるから」と。

その後Nさんは病状が少しずつ改善し退院の日を迎えました。ところが退院の当日の朝、Nさんの病状が急変し多量の出血があったと病棟から連絡が入りました。

私が部屋を訪問したときにはすでに意識は殆どありませんでした。そばで祈り部屋を出た私にNさんのお嬢さんが追ってこられ「母は亡くなる前に洗礼を授けて欲しいと願っていました。意識がなくなる前に私にそう言いました。」と言われたのです。すぐに洗礼式が行われました。「洗礼を授けますよ」と声をかけるとNさんはぱっちりと目を開かれ、うなずかれました。また洗礼式の後も「おめでとうございます」という言葉にしっかりとうなずかれました。そして安心したようにその日の夜、天に召されていきました。

Nさんは“死んだらどうなるのか”という問いに対して答えを見つけていかれそこに安らぎを見出されたのでした。

■罪責感

Tさん、47才、女性、子宮ガン

ある時病棟から「自分の感情をコントロールできず、痛い、痛いと泣きわめいてナースコールをたびたび押している患者さんがいる。洗礼を受けたいとも

口走っているのでとにかく一度来て下さい」と依頼を受けました。すぐにＴさんのもとを訪ねると、彼女は「ありがとうございます。自分のことを話してもいいですか？」といわれ自分の過去について話し始めました。

病棟では入院時に本人の病歴や家族歴が尋ねられ、チャートに記されます。Ｔさんはその時「私には２人の夫がいたと言いました。でも本当は４人の男性と暮らしました。16才の時最初の子供を産んで、相手が妻子ある男性だったので奪うように略奪結婚をしました」と言われ、この話から始まりご自分の過去を語られました。そして最後に「きれいになりたい！きれいになって天国に行きたい！」と泣き叫びました。これはまさに魂の叫びだと思いました。しかしこの叫びを前にして、私は何も語る言葉を持ちませんでした。ただマタイによる福音書にあるイエス・キリストの言葉を読みました「すべて重荷を負って苦労しているものは私のもとに来なさい。あなた方を休ませてあげよう」。少し落ち着いてきたＴさんは、今度は結婚前の子供の頃のことについて話して下さいました。Ｔさんは小さい頃友人に誘われて教会学校に通ったことがあったそうです。「そこでキリスト教には罪の赦しの洗礼があることを聞いた、それを私に授けてほしい」と申し出られました。

Ｔさんについてのカンファレンスがもたれた時、Ｔさんが洗礼の希望を持っておられることが話題になりました。

あるスタッフはＴさんを分析し、“この方は考え方の浅い方なので、なかなか自分をまとめていくことができない。洗礼を受けたいという希望も彼女の深いところからでたことではないかもしれないので、受洗してもこの方に変化はないだろう”、という意見を述べました。また、“入院したのがたまたまキリスト教病院だったからでた希望で、仏教ホスピスに入院していたら、仏教徒になりたいと言ったかもしれない”、という意見も出されました。牧師としてどう思うか問われた私は「変わる、変わらないは神様のなさることなのでわかりません」とだけ答えました。

その後Ｔさんのご家族とも話し合い、準備の時を持ち洗礼式を行いました。受洗後、Ｔさんの病状はよくなっていないにもかかわらず、不思議なことに痛

みがコントロールされていきました。表情が柔らかくなり、生きることに積極的になりました。以前は体の向きを変えるのも痛いとわめいていたＴさんでしたが、車椅子に乗ってロビーに出ることも、作業療法で手芸もできるようになりました。また冗談を言うこともできるようになりました。一緒に暮らした４人の男性のうちの一人はやくざの世界の人だったようで、その世界のこともおもしろおかしく話して下さいました。Ｔさんらしい大変よい時期を過ごすことができました。

ある時ベッドでロビーに出ている時、どこからともなく讃美歌が聞こえてきました。Ｔさんはこの時ぽろぽろ涙をこぼしながらこう言われました。「讃美歌を聞くと、うれしいような懐かしいような…涙が出てくるんや。“帰って来いよ”っていう神様からの信号をもらってるみたいや。いろんなところくぐってきてやっと神様のところに戻ることができた…」。

Ｔさんの痛みはまさに魂の痛みでした。ですからこの部分が解決されると不思議とすべてが良い方向に進んでいきました。

そしてこの魂の部分は決して学問的な分析によって判断できるものではないことを改めて知ることができました。

人間は人と関わる時、その関わりの結果を求めます（Ｔさんの場合、受洗するなら変わって欲しいという願いです）。そしてその求めた結果を関わりの目的としてしまうのです。しかしもし私たちが関わる相手を、自分の求める結果の側から見るならば、なかなかその結果に到達しない相手に対し、いらだったり不満をつのらせたりするでしょう。そしてその人と一緒に歩むことやその人に添っていくことができなくなってしまいます。

魂のケアにおいては、今あるその人に添っていくことことがもっとも大切であるような気がしています。

なぜならイエス・キリストの愛がそういう愛だったからです。イエス・キリストの愛は、「この人を変えてやろう」と迫る愛ではありませんでした。「人間は

こうあるべきだ、そうなれない者は救われない」とはおっしゃいませんでした。ただ罪深い人間から片時も離れずに愛して下さった、その結果人は変えられたのです。

ですから私たちが人と関わろうとする時、今あるその人にただより添っていくことが大事なのです。結果は後からついてくる、結果は神様が与えて下さるのです。私たちは関わりの目的を、その人の理想的な変化にではなく、添って歩むところに置きたいと思います。

■人生の価値

Kさん、63才、女性、甲状腺ガン

ホスピス入院の4年前に甲状腺ガンの手術を受けたKさんは、入院時すでにガンが骨に転移しており、ご自分では歩くことができませんでした。喉には3年前に呼吸困難のために施された気管切開の穴が痛々しく感じられました。

ホスピスには、Kさんに精神的ケアをしてほしいという家族の強い希望で入院してこられました。

しかし入院時のKさんは、自分のことを「まな板の上の鯉」であると言い、自分で何もできないことに苛立ちを感じておられました。Kさんの苛立ちの原因はこればかりではありませんでした。ホスピスは同室の方たちと病気のことについて語り合ったり、慰め合ったりできるところだとKさんは期待していました。ところがこの時の同室者は病状がすぐれず、自分のことだけで精一杯でKさんの語りかけに対してうまく反応できるような状態ではありませんでした。同室者と友だちになれないことはKさんにとっては大変な失望でした。またKさんは吸引やおむつのにおいが同室者に迷惑をかけている、自分は厄介者だからみんなに嫌がられるのだと思い込んでしまうほどでした。「いいんです、私一人が我慢すればいいことだから。いいんです。」と強い被害者意識を持ってしまい、自分の考え方やものの見方を少し変えてみようなどとはとても思えない状態でした。そしてついには、ホスピスを勧めた家族が悪いと責め立てるまでになってしまいました。「顔は笑って心はどしゃぶりね」と言うKさんに

対し、スタッフは「このままではいけない、どこかで何か介入しなければ」と考えていました。

そしてその頃から私はKさんと関わるようになりました。

Kさんは私が手渡した聖書（国際ギデオン協会）をすぐに開いて読みました。苛立ちや不安、強い被害者意識、自己嫌悪でどうしようもなくなるほどに追いつめられていたKさんが開いたところは、「非難され、ひどい仕打ちをうけた時（ギデオン聖書のガイド）」に読むとよいとされていた箇所でした。それほど迄にKさんは被害者意識にとらわれていたようでした。　この翌日Kさんは「夫と共に洗礼を受けようと思う」とスタッフに伝えられました。そしてこの日から私はさらにKさんと深く関わるようになったのです。

「病室の人間関係や苦しみは誰にもわかってもらえない、たとえ家族であってもわかってもらえない。頼るのは神様しかない。神様にすべてを委ねて楽になりたい。」とKさんは訴えられました。そして夫婦二人で受洗したいと申し出られました。夫婦二人で涙をポロポロこぼしながらの洗礼式でした。

その後Kさんに笑顔がみられるようになりました。また感謝の言葉も聞かれるようになりました。

穏やかな落ち着いた生活がKさんに訪れました。日が進むにつれて、Kさんはすこしずつ死についても話せるようになり、次のような会話がありました。「看護婦さんに、亡くなったとき耳とか鼻とかに綿を詰めるけど、私の場合は１個穴が多いでしょ（気管切開の穴のこと）。どうするんですかって聞いたんですよ。そしたらテープを上から貼るんですって。」「夜苦しいことがあるとこのまま眠っているうちにスッといけたらいいのにって思うこともあるんです。でもこんなこと言ってるけど気持ちはずいぶん落ち着いてきてるんです。だって笑ってこんなこと話せるんですもの」

笑顔で過ごすKさんは、同室者の家族から「いつもお顔を見て励まされています」と言われることもありました。

ある時Kさんはこのように言われました。「今まで娘や夫に自分の心の平安の拠り所を求めてきました。でも聖書を読んでわかったんです。自分が信仰を

持って、自分が変わらなければいけないって…本当にうれしい」。自分自身が変わらなければ、と言う言葉の中には、何か苦しい義務感のようなものは少しも感じられませんでした。

ある時二人でこんな話をしました。

人間は、家族や健康、自分の命などもすべてが自分のものだと思いこみ、それらを自分の自由にできると思っている。だから思い通りにならなくなると苛立ち、思い悩んでしまう。しかし人生というのは案外、「自分のものだと思っていたものがそうではなく、実は神から預かっているものだということを知って、手放していく」という作業をするようなものなのかもしれない、と。

Kさんは「すべてが自分のもので、自分の思い通りになる—そう思うところからすべての悩みがやってくる。私はそれでずいぶん苦しみました」としみじみと語られたのでした。

Kさんはこれまでの入院生活の中で、自分のものだと思っていたものが自分のものでなく、神様からもらっているものとしてこれらを受け取り直していきました。そして裸の自分がそのままで愛されていることを知って平安のうちに置かれたのでした。

「受洗してからは心も全部空っぽにできるようになりました。すべてが神様のご計画だったんですね。ありがたいです。私なんて恥ずかしがったって、身体はぜーんぶ開けっぴろげでしょ。看護婦さんにみんなお任せ。でも心の中は開けっぴろげにはできなかったんです。心はいつもどこか重たかったんです。でも神様の恵みを受けてからはやっと心も全部裸になれました。」Kさんは「頭のてっぺんから足のつま先まで、少しの無理もなく言えるんです」とほほえみながらおっしゃいました。

Kさんの夫は「ずっとどこの病院でもメンタル・ケアを望んできましたけど、それはかないませんでした。ここに来てやっとそのケアを受けることができて平安が得られました。薬のケアよりもっとすばらしいものを頂いてると思って

います。この平安な気持ちを大切にしてあげたい。」と言って下さいました。

その後、痰が多く辛い状況もありましたが、天に召される１週間前にＫさん夫婦にこんなやりとりがあったようです。

夫　　「なんか言いたいことあるか？」

Ｋさん「何もない」

夫　　「僕にはある」

Ｋさん「何？何？」

夫　　「天国はすてきなところらしい。天国に行ったら入り口で待っててほしい。僕もすぐに後で追いかけるから。中に入ったらわからなくなるからな」

Ｋさん（笑顔で聞いておられる）

この１週間後にＫさんは天に召されましたが、亡くなる数日前でも満面の笑みをたたえておられました。亡くなるその日も苦痛の表情はなく笑っているようでした。

5. おわりに

最後に患者さんとの関わりの中から、最近思わされていることを記しておきます。

■真の平安

よくインタビュー 等で「どのような死を迎えたいか」と尋ねられると多くの人は「安らかな死」と答えています。

人間はお金、地位、知識、人間関係、生きがい等を「持つこと」「得ること」に一生懸命になって生きています。ですから「安らかな死」を迎えたいと言うとき、それをも何とか自分の力で「得よう」といたします。　しかし、本当の安らかさや平安は、決して自分の力で掴み取れるものではなく、得ようとする

よりはむしろ手放すことによって得られるもののような気がしています。

自分の人生はこんな筈ではないと、いつまでも自分自身にしがみついている人の中に平安は見られません。安らぎは全てを手放したときに向こう側（神様から）与えられるもののように思われます。そして神様から与えられる安らぎだからこそ、自分のいろんな状況にかかわらず、動じないものとなるのです。

スピリチュアルな面での援助は、人が安らぎを得る上で非常に大切であると思わされています。そこでは人と人との関係や、人間を越えたものとの関係や神様との関係という「関係性」によって自分の存在の意味づけをすることができたり、自分の生きている意味や苦しみの意味を見出していくことが可能になってくるからです。

私は関わる方々が、真の魂の平安を得ていかれる姿に大きな喜びを感じているものです。

スピリチュアルケアにおいて、寄り添うことや関係を築くことを通してその方が安らぎを得て行かれる場面から教えられていることを記させていただきました。